



TITLE:

(隨想)フィラリヤ行脚

AUTHOR(S):

岡元, 健一郎

CITATION:

岡元, 健一郎. (隨想)フィラリヤ行脚. 泌尿器科紀要 1959, 5(4): 207-208

ISSUE DATE:

1959-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111754>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 5 卷 第 4 号

昭和 34 年 4 月

随 想

フ ィ ラ リ ヤ 行 脚

鹿児島大学教授 岡 元 健 一 郎

昭和21年、恩師皆見、富川両先生の恩命により当時の鹿児島医専に赴任したのは5月始めであつた。鹿児島は戦災によつて市街地の8割以上が瓦礫に帰し一望の焼野原である。私は七高に学んだので懐しい土地であるが、駅前からは一条の軌道が延びているだけで、何十分置きかに発車する電車を待つ人が列を作つていた。医専も基礎教室は市街南部の郊外であつたため幸に戦災を免がれていたが、附属病院は全焼して北部の盲啞学校に寄宿していた。

兎に角、診療と講義を始めたが講義室も盲啞学校の借部屋である。その後2、3カ所病院は転々として現在の場所に落着いて病院の新築が始められたのは昭和22年である。その間1年研究などということは勿論出来ず、その衝動にも乏しかつた。戦争病である疥癬、淋疾、梅毒など今考えると懐しい疾患の診療に忙殺され、駐在米軍から分与されるペニシリンの偉効に驚嘆していた。

鹿児島にきて2年目になつても臨床教室は建築ができず、纏つた研究は目算もつかない荏苒日を過して少々いら立つてきた頃、外来を訪れる乳糜尿、陰囊水腫などフィラリヤ症候群の患者が可成り多いのが心を惹いた。象皮病は流石に少ない。焼け残つた基礎教室の図書館には幸に皮性誌の **Backnumber** が揃つていたので繰つてみると鹿児島県に於けるフィラリヤ症の研究はここ暫く中断されていることを知つた。明治41~43年松下博士一門によつて種子島および附近の離島で始められた本症の研究は長く中断され、昭和13~17年西郷、松岡、前畠の諸氏により沖縄、大島などで再び取り上げられたが、その後また中断され、特に本土に於ける研究は殆どない。その後の本症の分布、侵淫度の推移、とくに本土に於ける状態をみるだけでも興味があるし、第一こんな仕事なら労力だけを惜しまなければ研究設備は殆ど要らない。これでもやつてみようと思ひ立つたのは昭和22年の春であつた。

先ず県医師会の名簿によつて県下開業の医家約500名に葉書アンケートを出して、最近5カ年間の本症受診患者の頻度を問い合わせて概況を知つた。それからボツボツ現地に出かけようというわけである。

鹿児島県の両方の脚をなしている大隈、薩摩両半島のうち大隈半島の南端、佐多町から入院していた患者が退院したので、頼んでその家に暫く寄せてもらうことにしたのは昭和22年9月である。汽車もバスも通わない所で、一応薩摩半島南端の山川町まで鉄道でゆき船で対岸の伊座敷に渡る。板覆いをかけた2屯程の渡船の筈に寝ころんで真夏の太陽をさけて約1時間、同行は永吉君である。伊座敷の浜は美しかつた。灼熱の太陽を照り返えず銀砂の浜に

南国の紺碧の海が迫っている。ひっそりと立ち並んだ葉ぶき屋根、石を乗せた板屋根の人家の後ろはすぐに黒々とした緑の楠と、密柑畑の山である。迎えにみえた患者の兄の川越氏の案内でその山を越えて東海岸に出ることにする。

両側から切り立つた断崖が迫る山峽を上りまた下る。蟬の音が耳に痛く、薄桃色の山芙蓉の花が濃い緑の中で目をなぐさめる。日が断崖の上に傾いて既に山道に届かなくなつて夕方川越氏宅につく。その間約2時間。同氏は佐多町東海岸の郡部落の焼酎醸造家である。数日帯在して小学校区を中心とした症状調査、血中仔虫検査などをする。

1日海岸に舟を出し部落青年の潜水漁法を見物したが、竹の先につけた鉈と、弓を携えて潜り、ものの30分程で収穫は目の下2尺程の魚と伊勢エビ数匹であつた。海岸に火を焚き、串にさした獲物を焼いて食べる趣は原始に近い。この漁法はその後、伊座敷、種子島、奄美大島でも度々みた。種子島では獲れた伊勢エビ、ザウリエビを海岸で火の中に投げ込んで甲羅が黒焦げになつたところを搔き出して食べた。この調理法は誠に贅沢なものでエビの姿の美しさは問題にせず、肉の味だけを賞味するのだが、恐らく最も美味な料理（といえるかどうか）であろう。海岸や舟で焼いた魚は酢醤油、酢味噌で食べるのがこちらの流儀である。焼酎の一杯がまた何とも云えず調和する。田畑が極少なく米麦に乏しいので漁師の主食はこのような魚と甘藷である。

佐多町には永吉君、松山君と同行してその後も26年まで三度び赴いて部落の人達とも馴染みになつた。ここでは抗フィラリヤ剤の長期効果や拡散因子に関する実験も行い、伊座敷の黒木医師宅では薬物による *in vitro* の殺仔虫実験などもやつてみた。その後、県下でフィラリヤ症調査のために歩いた地方も数多い。大隈半島中央部の岩川町周辺ではフィラリヤ症絶滅の状態をみた。離島方面では県の西北端、天草島に接する獅子島、永吉君は南方洋上の硫黄島、竹島、黒島で侵淫調査と免疫反応の実験を行い、松山君は同島で拡散因子に関する実験を行つた。種子島南端の島間では本症研究の拠点のつもりで部落診療所に3年間教室員が交代に赴いたがこれは失敗に終つた。その始末の一部は「いづみ」に書いたことがある。その他屋久島には昭和25年阿世知君と同行し、奄美大島の各地には昭和27、32、33年の3回本学の夏期無医村診療に同行した。

このように県下の僻地は相当に歩いたが、南方の珊瑚礁の島を洗う海の美しさは忘れ難い。また人情のこまやかさを満喫し得たこともこのフィラリヤ行脚のおかげと思つている。一方その貧しさとそれから逃れ難い宿命が本症侵淫の基礎をなしていることに、何時も胸をつかれる思いを抱いたのも事実である。

本症の研究もついつい年期がいつてしまつて永吉、永野、松山の三君はこれで学位を得たが、数年前からやうやく泌尿器科本来の研究も出来る態勢がととのい、県内のフィラリヤ行脚の杖が遠のいてきたのは一面残念とも思える。